17　東海初の洋式医学校を開設、地域医療にささげた白髭先生

近藤坦平
（1844～1929／鷲塚）

1　新しい医術を求めて江戸へ

近藤坦平は、弘化元年（1844）、碧海郡鷲塚村に祖父、父、伯父が医者という家系に生まれた。坦平は18歳のとき、父の勧めで、岡崎で医者をやっている宇都野龍碩（りゅうせき・父の従弟）と共に医術を学ぶために江戸に行った。ところが龍碩が藩の事情で1年もしないうちに帰郷することになり、やむなく坦平も帰郷した。

翌文久 3 年（1863）江戸留学への思い捨てがたく、龍碩の弟碩遵（せきじゅん・坦平より 2 歳下）を伴い再び江戸に出た。時の将軍家茂が上洛した年である。西洋医戸塚静海に学んだが、戸塚は忙しく、直接学ぶことが出来なかった。そんなとき、長崎から戻った松本良順に学ぶ機会が得られ、碩遵らと共に喜び学んだ。

2　長崎に留学

松本の下で 1 年が過ぎようとしていた元治元年（1864）、松本の長男と共に長崎に留学した。長崎では、精得館（日本最初の西洋式病院）においてボードウィン、ポンペなど当時有名なオランダの医学者に学んだ。

そこで、橋本綱常（つなつね・安政の大獄で殺された橋本左内の実弟で、後に東大医学部教授など要職を務める）や長与専斎（後に日本の衛生行政の確立に努めた医学界の重鎮）らと交流をもった。

しかし、長崎に学んで3年が過ぎた頃から幕末を迎え、世情が穏やかならない状況になり、学友は故郷に帰ったり、江戸に出た。坦平も長与らに江戸行きを勧められたが、故郷で親の跡を継ぐことを決意し、帰郷の途についた。慶応4年（1868）のことであった。

3　大きく変動する社会、鷲塚騒動に遭遇

明治元年（1868）24 歳で郷里に帰った。すぐに岡崎の宇都野龍碩の 16 歳になる長女の多田と結婚し、地域医療への第一歩を順調にスタートさせた。

しかし、時代の波は鷲塚にも及んだ。新政府による「廃仏毀釈」の方針に関する菊間藩（当地を治めていた沼津藩が現千葉県の菊間に転封されたので菊間藩になった）の出方に不満をもった寺の住職（星川法沢・ほうたくや石川台嶺・たいれいが中心）たちと本願寺門徒衆が菊間藩役人と騒動をおこした。（鷲塚騒動、大浜騒動や菊間藩事件などと言われる）明治 4 年（1871）のことである。坦平もけがの治療にあたったと思われる。多くの負傷者が出、役人の 1 人藤岡薫が殺された。（鷲塚の当地に藤岡地蔵堂がある）後に騒動をおこした首謀者や関係者が処刑されるなど大きな傷跡を残した。

4　「洋々堂」「蜜蜂義塾」の立ち上げ

鷲塚騒動翌年の明治 5 年（1872）、坦平は父の引退を受け、完全な蘭方医として「洋々堂」という看板を上げた。ところが村人は、なかなか蘭方医学がなじめず、しばらくは嫌がられた。

また、坦平は明治 5 年、「蜜蜂義塾」も同時に開設した。当初は洋々堂の不振と重なり、4 名の塾生からの出発であったが、医院の隆盛と共に、明治 8 年（1875）

頃になると、東海地方で唯一の西洋医学塾として塾生の数も増え出した。

この年、父は坦平の弟良薫（りょうくん・神奈川医師会の初代会長で福澤諭吉の養女と結婚）と末弟浩平が東京や横浜で生活していたこともあり、父の従弟の子で、良薫と生活し、神奈川県医になろうとしていた水平を養子にした。その後、坦平の義弟になった水平は蜜蜂義塾の副塾頭として、坦平の片腕となった。その翌年明治 9 年（1876）には、塾生も 80 名を越すようになり、洋々堂は病院や塾で大所帯になり、地域と一体になって大繁盛した。

5　地域医療に専念

何もかも順調に進んでいたその年（明治 9 年）長男が夭折したり、ふくらんだ塾の風紀が乱れたりしたが、妻多田の聡明な協力もあり、立ち直っていった。明治 12 年（1879）には、三男乾郎（けんろう・二男も夭折）が産まれた。名古屋に愛知県医学校が出来たこともあり、塾生も適正な人数になり、近郷はもちろんだが、静岡や長野、県内でも幸田、幡豆、半田辺りからも患者が泊まりがけでやってくるようになった。民家が病室になったり、宿屋やいろんな店が出来、洋々堂のお陰で村が繁栄した。また、坦平は愛知県会議員の選挙で副議長に選ばれ、新しい活躍の場が広げられることになった。

しかし、その年（明治 12 年）義弟の水平が西尾に「近藤医館」を開き、鷲塚を去った。明治 15 年（1882）、坦平 38 歳の年、医学校通則が出され、運営上困難であることを悟り、坦平は蜜蜂義塾を閉じることを決断した。更に漢方医らの抵抗もあったりしたが、時代の流れに背くことなく生きた。

また、坦平は地域への寄贈を惜しみなく行い、人望、財力ともに恵まれ、人々から尊敬された。（明治 20 年の「名誉力競」という三河国碧海郡の名誉番付で横綱なしの大関だった）

6　野口英世の手を手術した娘婿、近藤次繁（つぐしげ）

洋々堂が栄えていた明治 23 年（1890）、坦平の長女おきては、信州松本の藩士鶴見家の二男で、帝国大学医科大学（現 東大医学部）の学生次繁を婿養子に迎えた。次繁は、洋々堂を手伝ったが、明治 25 年（1892）にドイツなどに坦平の援助で留学した。3 年後帰国（次繁 28 歳、おきて 21 歳）し、洋々堂を洋々医館と改称した。

明治 30 年（1897）、次繁は東大助教授（すぐに教授）として上京した。そこで野口英世の手の 2 回目の手術を無料で行った。その後日本の外科学を欧州の水準にまで高め、外科学の権威として名を馳せた。岸田劉生作の「近藤医学博士像」の油絵も残っている。

7　晩年の坦平

坦平は 60 歳を過ぎても自ら手術を行ったり、村会議員や医師会の要職を務めた。息子乾郎を院長にし、一線を退いたが、功績により数々の表彰を受けた。

その後乾郎も上京したが、坦平は昭和 4 年（1929）に亡くなった。洋々医館は別の医師によって昭和 55 年（1980）まで続いた。今その地に「洋々医館跡」という石碑が立っている。

◆もっと知りたいなら

- 『近藤坦平物語』（平 21 市史料別巻 4 浅井久夫）
- 『近藤坦平の業績及びその一族の人々』（碧南市医師会・安井広）
- 『鷲塚騒動と洋々医館』（愛教大同窓会誌・北村恒）
- 『近藤坦平』（三河教育研究誌土屋利男）
- 『近藤坦平翁』（平 19 季刊誌『みどり』石川繁治）